



#### 14. 初めての日本へ

—ではこのへんで、吉林省民族音楽楽団で存分の演奏活動をしていた趙勇さんが、どのようなきっかけで日本へ来ることになったのか、当時の趙勇さんの思いも含めてお聞かせください。

日本へ来たのは、平成元年4月4日です。先に日本へ来ていて、福岡などで演奏活動をしておられる趙国良さんの誘いがあって、同僚の楽団員3名（私を含めて）と一緒にやって来ました。

当時は改革開放路線が始まり、外国の様子などもテレビを通して少しはわかるようになっておりました。特に経済発展めざましい日本を一度は見てみたいという思いは、同僚の楽団員たちにもありました。私も同じ気持ちでした。そこで私も、観光ビザ（3ヶ月間有効）を取って趙国良さんの誘いに応じたのです。

—日本への入国は福岡空港ですか。

いいえ、長崎空港です。当時は中国からの福岡便はまだありませんでした。九州に行くには長崎空港しかありませんでした。上海から長崎空港です。そして車で福岡まで行き、趙国良さんのお宅に私たち3人は到着したのです。

—当時、趙国良さんはどこに住んでおられたのですか。

姪の浜の市営団地です。小戸団地と言っていたと思います。団地の5階で、エレベーターもありません。2DKぐらいの部屋だったのでしょうか、趙国良さんご夫妻と子どもさん2人で住んでおられました。そこに私たち3名はお世話になることになったのです。

この団地の別の棟には、先に日本に移住しておられた国良さんの奥さんのお母さんや、奥さんの兄弟家族も住んでおられました。

—最初の日本は福岡市だったのですね。どんな印象でしたか。

まず、車の多さに驚きました。また、若者が車を持っている。当時の中国では考えられないことでした。しかも道や街中がきれいでゴミが見えない。中国の街しか知らない私には、やはり驚きでした。

スーパーに買い物に行くといろいろなものがいっぱい並んでいる。日本人の生活の豊かさを感じ

ました。物の豊かさだけでなく、環境や生活の便利さなど当時の中国との違いを強く感じました。  
——そのころの日本は、まだ住環境は十分ではなかったと思いますが、狭い趙国良さんの家でも大変だったでしょう。

そうですね。それが趙国良さんのところに着いてみると、国良さんの手配で私たちの演奏会の予定がいくつか決まっていたのです。驚きました。一緒に来た3人と趙国良さんの4人の演奏会です。

私と一緒に来たのは、私と同年代の男性で、琴奏者の江舟（こうしゅう）さん、もう一人は年配の女性で、琵琶奏者の曾桂芝（そけいし）さんです。それに私の楊琴と趙国良さんの二胡を加えて4楽器の演奏会です。

趙国良さんは、私の尊敬する大先輩です。当時、吉林省民族音楽楽団の二胡奏者であり、楽団のマスターでした。私が入団する時の審査委員長でもありました。私が入団してからは、私の音楽の才能を認め、さまざまな活動の場を作ってくださいました。将来は私に楽団の編曲者・作曲家として、また指揮者としての活躍を願っておられたようです。

その趙国良さんが、私が日本へ行く2年ほど前（昭和62年？）に日本へ行ってしまわれたのです。そこにはいろいろと複雑な事情があり、趙国良さんも悩んだ末に決断されたようでした。

というのは、国良さんの奥さんのお母さんは日本人で金子美智子といわれます。日本で中国人の留学生と結婚して中国に移住していたのです。そこで1男3女が生まれて、その一人の女の子と国良さんが結婚していたのです。だから国良さんの奥さん（中国名 李愛民）は日中の混血です。日中国交正常化した後も、なかなか中国在留日本人の帰国も進まなかったけれど、87～8年ごろになり「残留孤児」「残留婦人等」の日本帰国の動きが出始めました。その時に国良さんの奥さんの兄弟家族と奥さんの母親（金子さん）は、みんな日本への移住を決めたのです。ただ、国良さんの家族だけは日本行を決断できなかった。日本へ行っても今のような音楽の活動ができるかどうか、それによって生活ができるかどうか心配だったのです。奥さんの兄弟家族が全部日本へ帰った後も、国良さん一家は残って、国良さんは楽団での活動を続けていました。しかし、その後2年ほどして国良さん一家もついに決断されて日本へ移住されたのです。

そこが、福岡市の姪の浜だったのです。

趙国良さんは日本に来て1年半から2年ほど経っていたと思います。ご苦労もあったと思いますが、なんとか念願の日本での演奏活動もうまくいっていたようです。その中で、いろいろな人脈もできていたのでしょう。そこで、私たちとの中国楽器の演奏会を思いつかれたのだと思います。

私たちは3ヶ月の観光ビザであっても、日本人の身元引受人つまり保証人が必要だったのです。それは、趙国良さんの知り合いで、当時KBC放送の文化部長をされていた湯川茂光さんという方に引き受けてもらったのです。この趙国良さんと湯川さんのお二人によって演奏会などの計画が作られたのだと思います。

## 15. 日本での演奏活動

—日本へ来たなら早速演奏活動ですか。それは趙勇さんたちにとっては、願ってもないことではなかったのですか。

とんでもない。楽器はそれぞれが持って来てはいたのですが、みんなでの練習が必要です。それよりももっと大切なのは、四人で合奏するための編曲された楽譜が必要です。この編曲が大変です。

この編曲は、全部私がするのです。短時間ではとてもできません。時間がかかります。1曲仕上げるのに一晩かかることもあります。例えば日本の童謡などの歌詞とメロディーだけの楽譜をもらって、これを四つの楽器の合奏曲に作り上げねばなりません。更には、その曲に込められた想いや歌詞の意味も編曲では大事です。私たちは、日本語がわかりません、読めません。だから、それらのことは趙国良さんの奥さんのお母さんに全部聞くのです。奥さんのお母さん(旧姓金子さん)は、日本語も中国語もわかるから。また、大きなオーケストラで演奏する曲を、四つの楽器用に編曲しなければなりません。たくさん曲を編曲しておかないと演奏会は開けません。

編曲が出来上がるとすぐ練習です。練習のあいまに並行して編曲です。国良さんの狭い部屋の一室での練習です。練習を見に来ていた湯川さんは、四つの楽器による演奏を大変気に入って、ほめてくれました。

—どんな曲を選んで編曲し、演奏したのですか。

そう、最初は「青い山脈」「浜辺の歌」とか・・・「花」「隅田川」とか「黒田節」「ソーラン節」・・・そのほか沢山の童謡など・・・

これはみんな金子さんに教えてもらって編曲したものです。例えば「青い山脈」は戦後の日本人が明るく生きて行こうとしているイメージですとか、いろいろと曲の想いを教えてもらいました。

—最初の演奏会はどこでしたか。

住んでいる団地の公民館です。最初の試みの演奏会です。団地の区長さんをお願いして、無料で団地の皆さんに聞いてもらい、その反応を確かめることです。みんなに喜んでもらいました。湯川さんもこれを見て、今後の演奏活動ができると確信されたようでした。

—この後、いろいろな所で演奏会を行ったのですね。

そうです。福岡のいろいろな会場で。多久の中央公民館でもしました。以前には、趙国良さん一人の演奏会も多久であったはずで。というのは、湯川さんはもともと多久市出身だったそうで、そんな関係で、大平庵の木下さんや文化連盟の野方さんや不二見先生、元の市長の百崎さんを通じて多久との関係もできていたのでしょう。

—各地での演奏会は盛り上がりましたか。

そうです。どこでも大好評だったと思います。最初の団地の公民館以外は、みんな入場料をもらっての演奏会です。ここに一つの問題があるのです。私たち3人は観光ビザでの滞在ですから、法律上収入を得るような活動はできません。もちろん商売などは禁止です。趙国良さんの方は収益活動はできる。問題ありません。そのような身分ですから私たち3人は、民間交流の友情出演という形での出演・・・今でいえばボランティアという形で演奏会を続けたのです。

—出演料はなにももらえなかったのですか。

そうです。建て前上はその通りです(笑)。もちろん・・・。

大きな演奏会もありました。これは私たちが来日する前に、もう決まっていたそうです。これも

湯川さんの計画だったと思います。いま正確には思い出せませんが、「アジア祭」の「音楽祭」(?) というのでしたか、福岡・名古屋・東京会場と回りました。福岡は市民会館、名古屋は市民第1ホール(?)、東京はサントリーホールの中ホールだったと思います。

この演奏会が終わればもう帰ってもよかったです。他にもいろいろと演奏会が組まれました。また、福岡県内の各種文化・芸能団体等の催しなどにも呼ばれて演奏しました。例えば、お琴のグループの演奏会や、舞踊の会の発表会、詩吟の会などでの演奏もしました。

このような演奏活動をする中で、中国の民族楽器演奏のすばらしさが少しずつ日本人にもわかってもらったようです。このようにして3ヶ月間、月に4~5回の演奏会をしたでしょうか。

このような演奏会をしている中で6月4日がやって来たのです。天安門事件です。

## 16. 天安門事件

—あの、いわゆる天安門事件と日本に居た趙勇さんたちとどんな関係があるのですか。

これには、いろいろと前後の説明が必要ですが、私にとっては重大な日となったのです。大袈裟ですが。

中国の天安門事件は知っているでしょう。1989年(平成元年)6月4日、中国北京の天安門広場で、中国の民主化を求める学生運動に一般市民も加わる大規模な抗議集会に対して、軍隊が出動して集会参加者に発砲して、多数の死傷者が出ました。

この民主化運動は、5月ごろから始まっており、日本のテレビニュースなどでもよく流れていて、当時私は日本語がわからなかったけれど映像を見てほしいのことは分かっていました。当時、中国ではこんなニュース映像は見られなかったでしょう。10万人を超す大集会です。何度も開かれていたようです。東京でも中国大使館前などで中国人留学生などによる集会もあっていたようです。

丁度このころ、演奏会などで知り合いになっていた中国人留学生から、福岡でも中国人留学生などによる、本国の学生運動に連帯する集会を開くから、参加しないかという電話がありました。そこで私は江舟さんと二人で集会場所である福岡総領事館前に行きました。集会には30人ほど集まっていたと思います。ここにはテレビカメラも来ていて、集会の様子を写していました。私たちは集会が終わって帰った夜、テレビのニュースを見ていると集会の様子が映っていました。その中には私たちの顔もはっきり写されていたのです。そのときは、ああ映っているというくらいで何も考えていませんでした。その後、6月4日の事件が北京天安門広場で起こります。そして、学生たちの運動は抑えられてしまったのです。そして、弾圧が始まったのです。多くの者が調べられ、捕えられ、国外に逃亡した者もありました。

このような中で私たちの観光ビザの期限が近づいてきたのです。もうすぐ帰らなければならないのです。このとき、趙国良さんからもうしばらく滞在しないかという提案がありました。観光ビザは後3ヶ月延長できるのです。私はもう帰るつもりでいました。一緒に来た曾桂芝さんも帰るつもりです。江舟さんは日本に残りたいという。

このような時、中国人留学生に会って話を聞くと、中国では今回の事件に関わったの取り調べが大変厳しいという。私はすぐ国際電話(当時3000円のカードを買って)で中国の友人に様子を聞いてみました。友人が言うには、今は各地で調べが厳しい、少しでも学生運動を支持したり参加した者は厳しく処罰されている。趙勇さんが福岡でそういうことがあったのであれば、今帰るのは難しいだろう。もうしばらく静かになるまで待った方がいいだろうと言う。帰る気持ちでいた私も大

変迷いました。

## 17. 日本滞在を決断

### ——帰国間近になって大変なことになりましたね。

そうです。中国に残した家族のことを思うと早く帰りたい。しかし、今帰ると家族やまわりの人たちにも災いを及ぼすかもしれない……。

趙国良さんは、残って私と一緒に頑張ってみないかとも言われました。湯川さんとも相談しました。観光ビザを3ヶ月延長はできる。しかし、その次の延長はできない。3ヶ月延長しても、帰られる状況になっていけばいいが、状況が変わっていなくても観光ビザの場合はもう帰らなければならぬ。再々延長はできないとのこと。

湯川さんからもう一つの方法が提案された。それは留学ビザを取るのだと言う。留学ビザを申請するためには、本来一度帰国しなければならないが、今中国はこのような混乱の時期なので日本で手続きができるようになったとのこと。留学ビザを取るためには、どこかの学校に入らなければならない。日本語学校に入ったらどうだろう。そうすれば2年間の留学ビザがもらえると。そしてこの2年の間に、日本語をしっかりと勉強しながら演奏活動もできる。日本で生活もできる。

### ——趙勇さんはどうしましたか。

江舟さんは残るつもりでいます。曾桂芝さんは総領事館の集会には行っていないし、すぐ帰ります。私はいろいろ考え、中国の王艶さんの了解も得て最終的にはしばらく日本に滞在することにしました。

湯川さんに頼んで、江舟さんと私は留学ビザ取得の手続きをしました。同時に二人は、6月から福岡市内の日本語学校へ入りました。留学ビザは2年間有効です。その後更新も可能とのことでした。学校は博多駅近くの「日本語センター」というところです。

### ——これでなんとかしばらくは、2年間だけど落ち着いて日本で暮らせるようになりましたね。

そうですね。でも三ヶ月間のつもりで日本へ来て、この決断をするのは大変でした。やっぱり家族のことが一番心配でしたね。

日本語学校では、「あ・い・う・え・お」から勉強を始めました。「日本語センター」の校長は元NHKのアナウンサーです。そういう関係でしょう、アナウンサーOBの人たちの授業もたくさんあって、きれいな日本語の朗読なども聞くことができました。

このように学校に通いながら、一方では演奏活動も続けていました。日中友好交流の演奏会として。曾桂芝さんは中国に帰りましたから、江舟さんの琴と私の楊琴と趙国良さんの二胡による演奏会です。今まで、演奏会のマネージャー的なことは金子さんにしてもらっていましたが、この後は趙国良さんの奥さん（愛民さん）が引き受けました。

この間もしばらくは趙国良さんの家で暮らしていましたがその後、別の家へ移ることができました。それは、趙国良さんの知り合いで、南区大橋にお年寄り夫婦二人だけで住んでおられる家の一部屋です。無料で台所付きの部屋に二人で住むことになりました。しかし、それからしばらくすると江舟さんは奥さんにも留学ビザを取らせて中国から呼び寄せ、別にアパートを借りてここを出て行きました。そこで、日本での私一人の暮らしが始まったのです。

## 18. 日本で暮らしたい

——日本の暮らしはどうでしたか。

このような中で、少しずつ日本の暮らしにも慣れてきました。ここまでには、もちろん失敗や勘違いなどもたくさんありました。食文化も大変に違う。演奏会の後では歓迎の食事会などありますが、必ずお刺身が出てくる。とてもこんなものは食べられなかった。中国では生魚を食べない。生臭いと思った。きまって出てくる火にかけて小鍋の中に入れてから食べていた。今ではお刺身もおいしく食べられます。よその家で風呂に入ったとき、湯船の中で体を石けんで洗い、風呂のお湯を全部抜いて出てきました。後で怒られました。中国には風呂に入る習慣がない。ほとんどシャワーだけです。他にもいろいろありましたが、話せばきりがありません。

私は、日本人の生活の仕方、日本文化のすばらしさ、面白さなど、今までの中国にはない良さをたくさん感じました。中国に帰りたいという気持ちから、いつしか日本暮らしを続けたいという思いに変わっていました。自分自身でも不思議に思いました。

——そんな風に気持ちが変わって行ったのはいつごろからですか。

そうですね。日本語学校に通いだして半年過ぎころからですかね。当時はまだ日本語はよくわからなかったけれど、できれば日本で暮らしたいと思いました。家族も呼んで一緒に生活できればと思いました。子どもも日本で育てた方が幸せになるのではないかと考えました。そこで、王艶さんにもそんな気持ちを電話で伝えました。彼女は「あなたの思い通りやっていますよ。私はそれに従います。」という返事でした。

このように将来のことも考えながら、日本語の学習と演奏活動を続けて行きました。多久でも3回ほど演奏会を行ったと思います。多くの演奏会をするには新しい曲が必要です。多くの曲を編曲しておかなければなりません。クリスマスが近づくとジングルベルなどクリスマスの音楽を編曲して練習しました。演奏会では大好評でした。

このような暮らしの中で、もっと長く日本に滞在できる方法として、今の留学ビザから就労ビザへと切り替えを行ったのです。そのことが次の多久へとつながって行ったのです。

——留学ビザから就労ビザへの切り替えは簡単にできたのですか。

いいえ、大変難しい。いろいろ条件が揃わないと取得できない。多くの人の助力がなければできなかったのです。

愛民さんと湯川さんが考えて、湯川さんが関係をもっていた多久市文化連盟会長の野方さんや不二見先生に相談したのでしょう。野方さんは入国管理局へも行き、多久市文化連盟でもいろいろ思案し、なんとか二人を多久で引き受けることを考えました。最終的には、多久市文化連盟で雇用するという形になったのです。

——それはいつですか。

そう、平成3年4月です。いろいろと面倒なこともありましたが、多久の皆様の支えがあって、このようにして多久にやっと来られたのです。しかし、更に私たちの身分を安定させるため、翌年からは「財団法人孔子の里」の職員にしてもらったわけです。

(2014. 9. 24)